

子どもの第3の居場所と自己肯定感の関係性

ー子どもクラブの参与観察からー

山本 瑞希

日本の子どもたちは世界の先進国と比べると精神的幸福度が低く、特に自己肯定感が低いことが課題とされている。本研究は、児童館や子ども食堂などの「第3の居場所」を使って自己肯定感を上げることができるかを明らかにすることを目的とする。具体的な調査として、町田市児童館である小山子どもクラブ「さん」で小学3～6年生の11人に半構造化インタビューを行なった。また、2021年から2024年のおよそ3年間で参与観察を行なった。

得られた結果を自己肯定感に焦点を当てつつ、項目ごとに分類して共通点や相違点を考察した。学年ごとに分類した結果、学年が上がるごとに別の学校の生徒と交流が増え、大人との会話が容易になる一方で、自己肯定感は下がっていた。自己肯定感の高い人とそうで無い人で分類した結果、子どもの自己肯定感は第1の居場所が安定していること、第3の居場所が徒歩圏内など子どもが毎週通える条件にある場所に2個以上あることの2点が揃うことで支えられていた。また、「さん」を利用する目的は大きく分けて5つあり、①既存の友だちと交流すること、②興味のあることを長時間行なうこと、③交流関係を広げること、④普段の生活ではできないことに挑戦すること、⑤第1の居場所からの避難場所にするものであった。

インタビューと参与観察の結果と考察から明らかになったことは2つある。1つは子どもたちの自己肯定感を上げるためには第3の居場所だけでは限界があるということである。第3の居場所だけでは第1の居場所に対する支援を十分に行なうことができず、親と子どもの関係を良好に保つように働きかけることができない。もう1つは、第3の居場所には刺激と安定の絶妙なバランスが大切だということである。児童館には強い刺激もあれば、安定した面もあり、2つのバランスを崩さずに運営することが重要である。3つの居場所の連携と第3の居場所を増やすことが、今後の第3の居場所に求められている。